



Title	「オーウェルとビルマ」
Author(s)	藤原, 鱗
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2024, 10, p. 29-32
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/98143">https://doi.org/10.18910/98143</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「オーウェルとビルマ」

テキスト環境論 博士後期課程 1 年

藤原 鱗

## 1. はじめに

本研究では、英作家でインド警察としてビルマ駐屯地に勤務していた George Orwell (1903-1950) の処女作 *Burmese Days* (1934) を中心に当時の植民地ビルマにあった問題を参照し、作品を分析する。作中には、植民地支配者側であるイギリス人と被支配者側であるインド人、ビルマ人、中国人といったキャラクターが登場する。このエスニシティーの問題やビルマ人女性の問題にも焦点を当て、Orwell の描いた植民地ビルマにあった問題を当時のビルマ人風刺画家ウ・バーガレー (1892-1945) の作品を用いて分析する。

## 2. オーウェルの再評価、背景

ドナルド・トランプが 2017 年にアメリカ大統領に就任して以来、Orwell の代表作 *Nineteen Eighty-Four* (1949) に描かれる「ディストピア」が実現されるのではないかという懸念から、Orwell 作品が再注目され、近年ブームとなっている。そのため、「CiNii」における論考・評論・書評などのタイトルに「オーウェル」が含まれるものは、2017 年以降に登録されたものに限っても、現在に至るまで 100 本以上の記事を確認することができる。しかし、こういったオーウェル研究を参照してみても、*Nineteen Eighty-Four* (1949) や *Animal Farm* (1945) といった作品の研究が多く、*Burmese Days* といったビルマ関連の作品はあまり研究されていない。また、大石健太郎の翻訳版<sup>1</sup>に関しては、日本では絶版となっていることに加え、「CiNii」に掲載されている *Burmese Days* の論文は僅か 6 本、論文など *Burmese Days* について言及されている本は翻訳を含めて 23 冊しかないことから、本作に関してはあまり研究されていないということがわかる。

## 3. 「ビルマ」という呼称について

本研究で言及する「ビルマ (Burma)」は、現在では「ミャンマー (Myanmar)」と呼称されている。これは、「ビルマ (バマー)」とはビルマ語で同国を指す際の口語表現であり、ここには国内の少数民族が含まれていないとして、1989 年に当時政権を

---

<sup>1</sup> オーウェル, ジョージ. 大石, 健太郎訳. 『ビルマの日々』, 東京: 彩流社, 1988.

担当していた国家法秩序回復評議会（SLORC）が、国名の呼称を「ビルマ（バマー）」から文語表現の「ミャンマー」に改めたためである。しかし、この「国内の少数民族が含まれていない」という点については、疑問の余地が残る。ビルマ研究者の根本敬によると、1930年代のビルマではすでに、口語の「ビルマ（バマー）」が「英国統治下ビルマにおける被支配者のすべて」を指すとタキン党<sup>2</sup>が定義していた。そして、このときに「ビルマ（バマー）」が「ビルマ国民」とであると初めて定義され、この言葉が独立運動においても用いられたという背景が存在する。これらのことから、根本は「ビルマ（バマー）」が少数民族を含まない呼称であるというのは、こうした歴史的経緯からは疑問視されると指摘している<sup>3</sup>。これらを踏まえて、本研究では現在「ミャンマー」と呼称されている国を、従来の「ビルマ」と呼称することにしたい。

#### 4. 植民地時代のエスニシティー

##### <混血児そして中国人>

マグレガーが「子福者」と呼ばれるのは、彼のような白人がビルマ人女性を暴行し、その間に生まれた子どもたちが多くいたからだ。この子どもたちは、当時ビルマ人社会からも住む地域を分けられ、煙たがられていた。ビルマの英字新聞 *The Nation* 紙の編集長であったウ・ローヨン(U Law Yone) (1911-1980)の娘であるウェンディーローヨン (Wendy Law Yone) (1947-)は、軍の投獄から外国に逃れていたが、自身の帰郷をテーマにした *Golden Parasol: A Daughter's*

*Memoir of Burma* (2013)で英、日本占領下のビルマを振り返っている。彼女自身も四分の一英国人の血が入っており、父方が中国系で、母方が英国系であった。<sup>4</sup>本作でも「[...] 中国人はこの国では一等人種ですから。それに考え方もとても進歩的です。対等に付き合うのが一番いいんです」(大石訳, 170)とあるように、ビルマの中国系は商

Table 4. Chinese in Occupations, 1931

	Total		Chinese	
	Nos	%	Nos	%
<b>TOTAL</b>	6,211,037	100	92,213	100
Agriculture				
Field crops	4,009,135	64.55	16,396	17.78
Plantation	118,637	1.91	2,466	2.67
Animal Husbandry	79,900	1.29	1,694	1.84
Forestry	52,728	0.85	395	0.43
Fishing & Hunting	60,956	0.98	485	0.53
Mining				
Metals	12,480	0.20	2,940	3.19
Non-metal	27,025	0.44	938	1.02
Industry	664,376	10.70	15,433	16.74
Transport	222,055	3.58	5,789	6.28
Trade	469,198	7.55	29,757	32.27
Banking & Insurance	10,914	0.18	1,060	1.15

<sup>2</sup> 1930年に結成されたビルマ民族主義者による政治結社「われらビルマ人連盟」の別称。「タキン (Thakin)」とはビルマ語で「主人」を表わす言葉であり、当時ビルマを植民地支配していたイギリス人がビルマ人に自分たちのことを「タキン」と呼ばせていたことに對し、ビルマ人こそが国の真の「タキン」であるという意思表示としてこの名が付けられた。反映運動を展開し、1930年代後半には後にビルマ独立運動を指導するアウンサン (1915~1947) が党を指揮し、独立運動組織の先駆けとなった。

<sup>3</sup> 根本, 敬. 『つながるビルマ、つなげるビルマ』, 東京: 彩流社, 2023. (6-8)

<sup>4</sup> Wendy Law Yone, *Golden Parasol: A Daughter's Memoir of Burma*, Chatto & Windus, 2013. (67)

売人が多く、中国系には裕福な人が多いが、マグレガーの落とし胤ように、困窮した

アングロバーミーズ

英国系ビルマ人も数多くいた。ヤンゴン大学の歴史学者であった Tun Aung Chain

(1933-?) によると、1931 年の中国系移民の職業の中で一番多いのが数で言えば農業が多かったが、割合で言えば、貿易商が最も多かったという。

<インド人>

作中で、インド人であるヴェラスワミがなぜ嫌われ者になるのかということ、インド人をビルマの要職に据えていたことで二重統治になっていたからだ。ロンドン大学の Nalint Ranjan Chakravarti の博士論文“The Political and Economic Conditions of Indians in Burma: 1900-1941.”によると、1930 年代のビルマに入ってきたインド人には大きく三つに分けられるという。第一に、資本家や投機家、第二に、教師、教授、医者、エンジニア、弁護士、会計士、聖職者、行政官、のような知的階級、第三に、多くの数を必要とされた熟練労働者と非熟練労働者の労働階級であった。多くのインド人が導入され、第一、二のような知的労働階級のインド人たちの割合はビルマ人より多くを占めていた。ビルマが近代化されるに連れてこの知的労働がビルマ人にとって代わられるようになっていったものの、この第一に属するインド人がする商売は金貸しであるため、金持ちが多く、妬まれることが多かった。そして第二に属するヴェラスワミは医者であり、白人も診察している。自らを白人化させることに称賛と成功を収めてきたからこそ彼は、更なる白人化を遂げようと、白人クラブへの入会を求め、自国の同胞を顧みずに白人の統治がなければ文明化できなかつたと帝国主義を称賛する。「[...]」じゃ、ビルマは誰の援助も借りずに交易することが出来ましょか。機会、船舶、鉄道、道路といった建設が出来ると仰言るのでしゅか？あなた方がいらっしゃらなかつたら、ビルマ人は、何も出来やしましえん。

[...] (51-52)白人を追い出そうとしてきたビルマ人たちがいた一方で、ヴェラスワミのように白人化したことで私腹を肥やしてきた人もいた。マ・ラーメイは、フローリによって買われたのだが、当時ビルマの農村で良い結婚や仕事をさせるなどといって売られた貧しいビルマ人の女性を買い取っていたのは、インド人であった。これは、それらの注意喚起のために、ビルマの風刺画家ウ・バガレーによって描かれたもので、当時のビルマ人にとって白人同様インド人も脅威であった。<sup>5</sup>

Figure 1<sup>5</sup>  
Burmese Women Being Sold in Rangoon, by Cartoonist U Ba Gale



Brokers, clerks and young men lure poor Burmese girls from villages to the city on the pretext of a good life, job and marriage. The unsuspecting girl is then 'adopted' by a local woman and finally sold off to an Indian customer.

<sup>5</sup> Mazumder, Rajashree. *'I do not envy you': Mixed marriages and immigration debates in*

## <ビルマ人>



本作の中では、マ・ラーメイが『白人の妻』<sup>6</sup>であることを誇っていたように、白人化するビルマ人たちがいた。以下の風刺画も、この白人化するビルマ人たちを揶揄したもので、これもまたウ・バガレーによるものである。この風刺画は、政府高官の妻たちで、ゴルフやトランプで博打をしている彼女らを非難しているものだ。彼女らは非難される一方で、マ・ラーメイのような一般的な家庭の出のビルマ人にとっては、このような白人にかぶれた豊かな生活は、憧れであったことだろう。しかし、貧困に喘ぐ国民からは大きな反感を買った。最後の描写には、このようにマ・ラーメイの風貌を記述している。「あの<sup>おしろい</sup>白粉を塗りたくった気狂い女がフローリの愛人だったと考えるだけで、骨の髄まで<sup>ふる</sup>慄えが取り憑いていた。」(357-358)白粉を塗りたくり、自身の肌を白に近づけようとしたということは、白人になりたいという願望の現れとも取れる。マ・ラーメイが白人の妻に憧れ、『白人の妻』ために必死であったように白人化する女性たちは当時のビルマ人からは妬まれ、疎まれる存在でもあった。

## <結論>

以上のことから、作中に描かれるビルマの問題は、実際の植民地ビルマにも大きな問題となっていたということが確認できた。マグレガーが「子福者」と呼ばれる裏には、陵辱された女性たちとその子どもの困窮と差別の問題や、白人化するインド人と白人の妾となったビルマ人女性たち、そして人身売買の問題が植民地時代のビルマにはありふれていて、それをオーウェルはそれを作品にそのまま描写していたのだということが見て取れる。

---

*the 1920s and 1930s Rangoon, Burma*, Sage Journals, 2014. (2022 年 11 月閲覧)  
[‘I do not envy you’: Mixed marriages and immigration debates in the 1920s and 1930s Rangoon, Burma - Rajashree Mazumder, 2014 \(sagepub.com\)](#)

<sup>6</sup> bo-kadaw ビルマ語で bo が白人で kadaw が妻だが、陰口などで使うため、オーウェルの『『ボーカドゥ』即ち「白人の妻」としての立場を誇らしく[...]」(71)といった使用は間違っている。